

〔明月記〕寛喜二年七月十四日癸卯近年民家今夜立長竿其鋒付如灯樓物張紙舉灯遠近有之逐年其數多似流星人魂夜著綿衣

〔宣胤卿記〕文龜四年元正七月十四日壬寅燈樓一水中蟹屋上鳥有入持鉗蟹東坡愛及屋上鳥有本文進内裏御悅

喜之由有御返事益供如例

〔鹽尻十六〕一二水記七月生御靈

一十三日今日各燈籠進上按ずるに明月記に寛喜二年七月十四日の條に近年民家今夜立長

竿其木梢附如燈樓物張紙舉燈遠近有之といへり賢按四季物語に靈屋へ火を上ルなるべし

偏家の事に而はなし其時は未だ官家に用ひ給はざる事明らけし況や朝廷をや其後張燈盛

になりて三元の燃燈を附會し其本を忘る今七月十四日朝廷御燈籠を獻す永正の時のごとし

〔をときばうこ〕牡丹燈籠 年毎の七月十五日より廿四日までは聖靈のたなをかざり家々こ

れをまつる又いろくの燈籠をつくりてあるひはまつりの棚にともしあるひは町屋の軒に

ともし又聖靈の塚にをくりて石塔のまへにともすその燈籠のかざり物あるひは花鳥あるひ

は草木さまざままほらしくつくりなしてその中にともしびともして夜もすがらかけをくこ

れを見る人道もさりあへず又そのあひだにをどり子どものあつまり聲よき音頭に頌歌出さ

せふりよくをどる事都の町々上下みなかくのごとし天文戊申の歳五條京極に荻原新之丞と

いふものあり近きころ妻にをくれて略

いかなれば立もはなれずおもかげの身にそひながらかなしかるらむとうちながめ涙をを

しぬぐふ十五日の夜いたくふけてあそびありく人も稀になり物音もまづかなりけるにひと

りの美人その年廿ばかりと見ゆるが十四五ばかりの女の童にうつくしき牡丹花の燈籠もた

せさしもゆるやかに打過る略中その後雨ふり空くもる夜は荻原と女と手をとりにくみ女のわ